

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

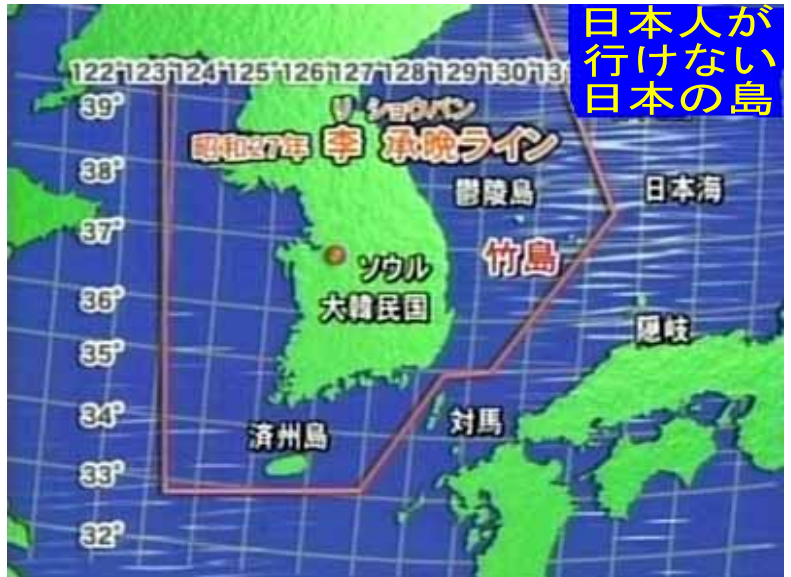
# 敬神尊皇 黎 REIMEI 明 報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0024号  
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成18年4月27日

## これで良いのか日本外交

### 竹島紛争、日本は調査中止、韓国は名称提案せず、先送りで合意

**反日の源流・李承晩** 竹島を論ずるうえで日本人なら決して忘れてはならない屈辱の歴史がある。昭和27年(1952年)1月18日反日の源流として名高い韓国の初代大統領の李承晩は、国際法を無視して問答無用とばかりに日本海にラインを設定して本来日本が大手を振って操業できる漁場や水域内に存在する全ての天然資源を一方的に韓国のものとし、ライン内に入ってくる日本の船は武力を持って容赦なく排除すると通告してきた。当然日本はこの理不尽な通告を認めることはなく抗議をするが、敗戦の痛手から脱し切れない日本には怒りに震えながらも地団駄踏む他に術はなかった。韓国による日本漁船の拿捕は、昭和40年



に日韓漁業協定が締結され李承晩ラインが廃止されるまで、実に13年の長きに亘り続いたのである。その間、韓国の非道によって抑留された日本人は3929人、拿捕された船舶数328隻、死傷者は44人を数えるに至った。そしてあろうことか韓国は、劣悪な環境と人間扱いされない抑留生活において、解放されなかつたら死は免れなかつたであろう3929人の同胞の命と引き換えに、大量の在日凶悪犯罪者の無条件釈放と在日韓国人全員に特別在留許可を与えることを要求してきたのである。日本政府は同胞の生命を守るため止むを得ずこの要求を承諾することとなった。これは現在における在日問題の根幹に関わることであり、韓国が竹島を不法占拠し、今日に繋がる竹島紛争の根源となっている。本来ならば戦争になってもおかしくない韓国による主権侵害と殺戮行為だが、前述したように日本は、敗戦の痛手から脱しきれない状況下であり、他人の家に土足で踏み込んできた強盗のなすがままにされるしか無かつたのである。それを見越して韓国は素知らぬ顔で極悪非道な大罪を犯し続けてきているのだ。我々日本人は、事大主義、小中華主義と言われる捻じ曲がった概念が、韓国人の思考を支配していることを思い知り、韓国人に対するお人好しとも言える意識の改革をしなければ、過去から現在に続く屈辱の歴史が、未来永劫に繰返されることを覚悟しなければならない。

**「火病」に侵された韓国人の脳髓** 韓国社会の文化を背景とする精神的疾患に「火病(かびょう・ふあっぴょん)」という馴染みの無い病があるが、1996年に米国の精神学科協会は、韓国人特有の文化結合症候群の一つとして認定している。火病に罹ると、大声で怒鳴る、物を投げまくる、地面を転げ回る、脱糞するなど、その行為は常人の理解の及ぶところではないという。病気が原因ならば、韓国人が靖国や竹島だけでなくあらゆる事に難癖をつけてヒステリックになるのも頷けるといふものだ。

6月にドイツで開催される国際水路機関の会議に、韓国が海底地形名登録に独自(韓国名)の提案を行うおうとしている事を受けて、日本側は海上保安庁の調査船を出航させて、国連海洋法条約に基づいて設定されている日本の経済的主権水域であるEEZ内での調査を発表した。自国のEEZ内で自国の調査船が海洋調査することの何処に問題があるというのか、しかし韓国は大統領の盧武鉉が先達となって反日の狼煙を上げたのである。盧武鉉は「日本は北東アジアの平和を壊している。第2の侵略行為であり、挑発だ。国際法を遵守するのに何の意味があるというのか、これ以上静かな外交をする時ではない。」と毎度おなじみの反応を示している。これに対して日本は「明洋」と「海洋」を境港沖に待機させ、いつでも竹島に向える態勢を整えた。今までならば、特定アジア(支那、南北朝鮮)には腫れ物に触るように接し、

摩擦を避けてきた日本政府と外務省だったが、今回は良い意味で期待を裏切る毅然とした態度を示した。直ぐにでも調査できるように鳥取県境港市沖で待機する明洋と海洋、拿捕も辞さずと意気込む韓国、冷静な対応を求めながらも後に引かない日本政府、この時多くの国民は「やっと日本も普通の国として第一歩を踏み出した。この勢いをもってして特定アジアの国々に、真の日本の力を知らしめてくれるだろう」と大いなる期待を寄せたのである。しかし、その期待が幻となるのに長い時間を要することはなかった。



境港沖で待機する海洋(手前)と明洋

**捨て去られた勝利の条件** 例によって韓国側は「問題が生じたら全ての責任は日本にある」と狂人ならではの論を繰り返し「日本が調査をやめるのが先決だ」と調査の中止を求めるが日本は「先に韓国が名称の提案を取り止める」と韓国側に要求し、解決の糸口が見えないまま膠着状態となっていた。しかし22日夜事態は急変した。この日、朝9時半から夜7時まで、谷内正太郎外務次官と柳明桓外交交通商第1次官との会談は断続的に続けられた。調査船が待機してから既に3日が過ぎ、交渉決裂は必至となっていたが、急転直下、事態は呆気なく馬鹿馬鹿しく消化不良の決着を迎えた。日本側の説明によると、韓国が6月の国際会議で竹島周辺の海底地形の韓国名表記提案を行わない。日本は今回予定していた海洋調査を中止する。両国はE E Z境界画定協議を5月中にも再開する。ということで合意したということだが、これは武力衝突を恐れる日本側の譲歩によるものであって、問題の先送りに過ぎない浅はかな妥協の産物であった。

当初日本政府の「勝利の条件」は、韓国が6月の国際会議で竹島周辺の海底地形の韓国名表記を提案することを阻止することであった。しかしこれは「まやかしの勝利の条件」であって「真の勝利の条件」とは言えない。つまり政府の設定した目的には、竹島を奪還するための布石を打つとか、日本の正当性を世界に知らしめるとか、将来の視点に立った活動は含まれていなかったのである。政府の設定した目的に含まれなかったこれらの事こそ「真の勝利の条件」であり、政府はその「真の勝利の条件」を端から捨て去っていたのである。外務省の役人は、自分の在任中はできるだけ摩擦を避け、衝突が回避できるなら謝罪や賠償も厭わず、ひたすら事なかれ主義に徹しようとしているが、これ程重大な事を外務次官が一人で決定できるとは考え難い事から、首相も外相も官房長官も終始、同じ位置に立って動いていたことは間違いないと言える。今回の合意は竹島紛争解決の更なる先送りであり、日本政府は妥協するべきではなかった。衝突を恐れていたのでは竹島を奪還することはできない。もういい加減、韓国との交渉に常識は通用しないことを認識するべきである。日本の領土でありながら韓国人が占拠している島、日本の領土でありながら日本人が行けない島、耳を澄ませば竹島の悲痛な叫びが聞こえてくる・・・「韓国人を追い出してくれ、俺を日本に帰してくれ」・・・と。



竹島は

泣いている

**空気を吸い、嘘を吐く韓国人** 心ある日本人ならば納得のいかない事であるが、日本の譲歩により一応の決着がついたと思ったのも束の間、韓国人が下劣な本性を剥き出しにしてきた。韓国大統領・盧武鉉は25日、特別談話の中で、日本が主張する竹島に関する当然の権利を「帝国主義侵略戦争の占領地に対する権利であり、過去の植民地領土権を主張するものだ」と批判し、さらに「独島(竹島)問題は、これ以上冷静な対応で管理することはできない問題となった」と延べ、軍事力行使も辞さない考えを示した。火病に侵された盧武鉉は3日前の合意など何処吹く風とばかりに、力づくでも竹島の不法占拠を続けることを明確にしたのだ。空気を吸い、息を吐くのが普通の人間だが、どうやら韓国人は空気を吸い、嘘を吐く民族のようだ。盧武鉉に続いて日本側との交渉の当事者であった柳明桓は、6月にドイツで開催される国際会議での韓国名称の提案見送りまでは合意していない、準備が整えば提案可能だとの認識を明らかにした。舌の根の乾かぬうちのこの発言は、韓国が日本との交渉など最初から真面目にする気も無ければ、約束を守る気など毛頭無かった事を如実に物語っている。韓国人が約束を守らない民族だということは、太陽が東から昇り西へ沈むという自然の摂理以上に分かりきったことだが、まさか3日前の合意を反故にするとは何をか言わんやである。

この期に及んで外務省や朝日新聞などの反日メディアは、「事態を見守って、冷静に、大人の対応を」などと戯けたことを言っているが、事態を見守り冷静に大人の対応をしなければならないのは韓国であり、この機会に日本は肅々と調査を進めるべきだった。仮に韓国が調査船を拿捕したならば、国際裁判所に提訴することもできた筈だ。現に「明洋」と「海洋」の乗員は悲痛な覚悟を固めていた。軍事力を行使し拿捕も辞さないとする韓国に丸腰で立ち向かい、いざとなったら命を賭けて韓国の非道を全世界に知らせる決意だったのだ。しかし政府の出した結論は、この決意を無視し、決着を先送りするものであった。外交とは国益を守る為の国家間の戦争である。首相が「円満な解決」を選択し決着を先送りする限り、竹島が日本に戻る日はやって来ないだろう。【領土は1ミリたりとて妥協してはならない】

編集人/戸出蒼流